
Lost Legends

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Legends

【Nコード】

N2332T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

ある国の王子が、地下書庫で見つけた書物から全ては始まった。国の秘密を知った王子は、国から逃げることに。不思議な地球儀によって導かれたその先は、見知らぬ場所だった。しかし、どこか懐かしさも感じて……。

サイト、dノベ転載

始まりの地球儀 <1>

ラクアクローザーという王国があった。

その国の第二王子のレイズは、今は亡き母君の影響を受け、とても勉強家であった。

その日も、城の地下書庫に籠って本を読み漁っていた。

「……ん……こんな本あったかな……」

見慣れぬ装丁の古めかしい本を見つけ、レイズは手に取った。

そして、軽く本を眺めて 「あること」に気付いた。

「……何だ、これ……」

そこに書いてあることは、この国の歴史だった。

しかし、今まで伝えられてきたものとはまるで違うものだった。

どこが違うなどと、いちいち数え上げていられない。全てが違うのだ。

まるで、今まで学んできた歴史が作り上げられたものであるかのように

そう、作り上げられたように……。

「これは大変なことだ……!」

レイズは慌てて本を持ち、上っていた梯子を下り、書庫の外に出ようとした。

が

「レイズ王子、何をそんなに慌てておいでかな」
書庫の入り口には、総務大臣のベクトリオールが悠然と立っていた。

レイズは、何か嫌な予感がした。

そして、それは当たっていた。

ベクトリオールの後ろには、何人か、決して少ない数ではない兵士が控えていたのだ。

「総務大臣、そこをお通し願えませんか。私は王に伝えねばならないことがあるんです」

レイズは、きつと無理だろうと思いつつながら、気持ちを静めてそう言った。

ベクトリオールは、ニタリと意地の悪い、粘つく笑みを浮かべてレイズを見据えた。

「その望みは叶いません、レイズ王子。

なぜなら……その本もあなたもここで消えるからだ！」

その言葉が終わると同時に、兵士達が書庫の中に流れ込んできた。レイズは書庫の奥へと走り出す。

幸い、ここは隠れる場所はたくさんある。

ひたすら兵士の目をごまかして、レイズは書庫を逃げ回った。

しかし

「レイズ王子、多勢に無勢です。本気で逃げ切れるとでもお思いだったのですか？」

わが国の兵士の力を見くびっていらっしやっただみたいですね」
ついに書庫の隅に追いやられてしまった。

万事休すか……！

レイズは、あきらめにも似た念を感じていた。

追い詰められたレイズは、壁に寄りかかる。

「!」

寄りかかると、壁の一部が、木がぶつかるような音をたてて、ひっくり返ったのだ。

レイズはその向こうの空間に入り込み、その壁の一部は、回ってまた元に戻った。

そこは元通りの壁しかなかった。

「……ったー……」

レイズはめいっぱい打ち付けた腰をさすりながら、起き上がる。入った時は真っ暗かと思われたその空間は、閉じられるとほのかに明るかった。

そして、その明るさは、ある場所から出ていた。

それは、部屋の中央に、金属のような光沢をもつ球からだった。

レイズはそれに手をのばして、つかんだ。

得体の知れないものだったが、不思議と惹かれたのだ。

いや、きつと、幼い頃に母に聞かされた話を頭の片隅で覚えていたからに違いない。

この城には、全てを見通す地図がある。

それは丸い形をしていて、地球儀のように表面には図柄が刻み込まれているけれど、本当の地図は、それを手にすべき人によってのみ開かれる。

レイズが球形の物体をつかんだと同時に、その球体はバラバラになった。

レイズは慌てて球体の部品を寄せ集めて、どうしたものかと思案した。

だが、すぐにその部品をどう組み立てればあの球体に戻るのかが思いつき、手が勝手に動いてどんどん球体を組み立てていく。そしてできあがった球体には、先ほどとは違う図柄が描かれていた。

これは地図だ。しかも、どこかで見たことがあるような……。

そうレイズが思った瞬間、球体から光が溢れ出し、レイズはそれに包み込まれ、次の瞬間にはそこから消えていた。

「ちょっと、あんた……」

大人とも子供とも言えない少女の声が遠くで聞こえた。

レイズが目を開けると、目の前に、その声に似つかわしい少女がいた。

赤みがかった金髪を肩に流している、澄んだ青い瞳が印象的な少女だった。

レイズは、視線が定まらぬまま、何となく少女の方に目を向けていると、少女の方がしびれをきらし、また声をかけた。

「こんなトコにいられちゃ困るんだってば！ いい加減シャキッとしないさいよっ！」

と言うと、少女はレイズの顔を平手ではたいた。何発か。とても小気味良い音が響いた。

「……………」

レイズはさすがに寝ぼけてはいられないことを悟り、ゆっくりと起き上がり、はたかれた場所をさすった。

その場所は、少し赤みがさしていた。

「目が覚めた！？ 見つかるよめんどうだから、ここから出て行ってもらえない?!」

少女は怒鳴りながら立ち上がり、レイズを上から睨みつけた。

「これは、ご迷惑をおかけしてしまったようですみません。すぐに出て行きます」

そう言つと、レイズは立ち上がり、そのままつすぐ歩いていった。

が、歩いて数歩で、またすぐに立ち止まり、少女の方を振り返った。

「申し訳ないのですが、どこに行けばいいか教えてもらえませんか?」

少女は呆然として、しばらく動けなかった。

それから、レイズは少女に連れられて、門にいた。

レイズは、どうやらある国の城で倒れていたらしい。

そして、少女の話の聞いたり、周りの様子をつかっていると、レイズがいた所とは、時代が違うようだ。

場所が違うかは、まだわからない。

屋敷や庭の造りを見ると、レイズのいた国のものと似ているようだが、少し違う。

どこかまだ荒々しく、繊細さにかけた柱の飾りなどがそれを現していた。

このような細工は今まで見たことがない。

これは、非常に興味深いぞ……。

自分が今置かれている状況はそっちのけで、レイズは好奇心いっぱい周囲をキョロキョロと見ていた。

そして、見知らぬ場所なら、頼れるのは今日の前にいる少女しかない。

どっちにしたって聞くしかないじゃないか。

「すみません、お教えいただきたいのですが、ここはいつの時代の何という国ですか？」

という訳で、まずは基本的な質問から。

少女は眉を盛大に寄せ、訝しげな表情をしたが、とりあえず質問には答えてくれた。

結構世話好きなタイプのようにだ。

「ザグス暦1407年赤月（8月）2日の、ここはログス国を治める王様の城だよ」

ログス？

今度はレイズが眉をひそめる番だった。

そんな名前の国は聞いたことがない。

国の興亡はよくあることだが、文献にさえ載っていないなんて…

もしかして、失われた文明のある国かも？！

ではなくて。

もしかすると、あの文献に載っていたことと関係するかもしれないな……。

そう、そっちです。

なぜなら、ザグス暦は自分の国があった地方の暦でもある。

ということは、やはりここは自分がいた場所の時空を飛び越えた所、ということになる。

レイズがいたのはザグス暦2007年であるから、ちょうど600年前だ。

文献には、その習慣的面や地理的面からも、どうやら自分のいた地方のことらしい記録がある。

「……………」

レイズが急に黙り込んだので、少女は様子を伺うようにレイズを黙って見ていた。

が、突然何か思い出したような顔をし、レイズの肩を叩く。

「そういえば、あんたの側にこの球と本が落ちてたわ。つい渡すのを忘れてごめんなさい」

そう言って、少女は言った通り、何か不思議な模様が刻まれ、金属の光沢を帯びた球と、古びた本をレイズの前に差し出した。

それは、どこかで見覚えがあるような

……………これは、あの時のものだ！！

そうわかったレイズは、少女からひったくるように球と本を取る。

そして、またしばらくじーっとそれを見つめる。

どちらも自分の城で見た時のままだった。

そうしてしばらくしていると、レイズは何か考えが浮かんだように少女を見て、こう問いかけた。

「僕をここで雇ってもらえるように頼めませんか？」

少女は、今日二度目の硬直をした。

始まりの地球儀 < 2 >

そしてレイズは今、ログス国城の小間使いの控え室にいた。使用人には使用人のための別館がきちんとあるようだ。

しかも、清潔で造りもしっかりしている。

この国は使用人の待遇もいいようだ。

レイズは、頼んではみたものの、きつと少女は「は?!」とでも言っただけ追いつくと思っただけ。

だが、意外と素直に「頼むだけ頼んでみてあげる」と、ここまで連れてきてくれたのである。

そして、今少女が使用人の長格らしい人物に頼みに行ってくれている。

そういえば、彼女の名前を聞いていなかった……。

あまりにも事がスムーズにいつているため、レイズは拍子抜けしていた。

そもそも、なぜレイズがそんなことを頼んだかというところ、この国に少なからずとも消された歴史についての何かがあるのではないか、と思っただけである。

きつと自分がこの時代に来たのは、この不思議な球のせいではないかとかとレイズは思っていた。

そして、きつとこの時代に来たことは、偶然ではないはずだと信じていた。

見知らぬ所に来たレイズにとっては、それが頼みの綱だったとも言えた。

そんなこんなしているうちに、少女が戻ってきた。

「ちょうど使用人の数が足りないから、来てもらえるとありがたいっつて。」

でも、王様に挨拶はしてこないとダメだそうよ。

明日の早朝に拜謁の許可が出たけど、いい？」

いい？と聞かれても、嫌だと言える雰囲気でもないし、頼りになるものがないレイズにとっては、嫌という理由もなかったので、コクリとうなずいた。

少女は満足げにうなずき、「しっかりやるのよ」と言っつて部屋を出ようとしたところを、レイズは呼び止めた。

「すみませんが、あなたの名前は？」

まぬけと言おうか、他が見えないと言おうか、とにかく、レイズの調子はずれな質問に少女は苦笑しながらも、答えた。

「あたしの名前はクーラよ。これから仲間なんだから、ちゃんと覚えておきなさいね」

そう言つと、少女は部屋を出た。

レイズは城のテラスにいた。

小間使いも利用できる施設の中に、円形に囲む壁の全ては窓で、月明かりが優しくテラス内を浮かび上がらせる。

レイズは、自分が持ち出してきた本を読むためにここに来た。

小間使いにも、きちんと1人が眠れるベッドが与えられるのだが、他の人も部屋にいるため、あまり遅くまで読んでいては迷惑がかかる。

自分もあまり遅くまで起きていてはいけなのだが、レイズは知的好奇心のためなら徹夜も苦にならないのだった。

むしろ、その好奇心が解消されなければ、気になって眠れないのである。

本は最初編年体かと思っていたが、その流麗な筆跡や言葉遣い、内容から、高官の日記のようであるようだ。

レイズは最後の近いページに目を通していた。

『赤月8日

隣国のクローザー国が我が国を侵略しようと企んでいるという情報が入った。

だが、それが確かなことだとしても、何も証拠はないから問い詰めることができない。

それに、クローザーのような強大な国に、我が国のような小国が勝てるはずもない。

ヤツらは我が国の至宝であるセラア姫を狙っているに違いない。かの有名なレイズのような策士がいれば、そのような形勢も逆転するのかもしれないが

レイズは、自分の名前が出てきて少し驚いた。

だが、どうやら、このレイズというのは、この国の古くから伝わる話の人物なのだろうと推測される。

いや、この日記のようなものの後の方のページには、この国の伝承なども記されているところがあった。

そこに確か……あった。自分の推測どおりのことが書かれていた。

ただの偶然なのだろうか……？

レイズは何か引つかかるものを感じていた。

そして、その日記の次のページをめくると、焦っているような殴り書きであった。

しかも所々になにやら黒いシミのようなものがついている。

レイズはとても嫌な予感がしながらも、読み進めた。

『赤月10日

クローザーが攻めてきた。ヤツらは奇襲をかけた。

そのようなことをしなくても勝てるだろうに、ふざけたことを。しかし、姫だけは。そして、どうかこの記録を誰かに』

文章はそこで途切れた。

文の最後には、ひときわ大きい黒いシミがついていた。

レイズは一旦本を閉じ、ふと外に目をやると、ある植物が目についた。

それはどこかで見たことあるような

！！

見たことがあるような、どころではなかった。

その白くて大きい可憐な花は母が好きだといつもレイズに見せていたコモンという花だったのだ。

レイズはある仮説を考え出していた。

自分のいた国の名はラクアクローザー。

ラクアとは、この地域の昔の言葉で「新しい、改めた」という意味がある。

もし隣国にクローザーという国があるのなら、この国がその国に攻められ、占領された後が自分のいた国ということになる。

いや、それだけなら繰り返されてきた歴史の1ページに過ぎない。だが、レイズはそれだけではないと思った。

なぜなら、母の名前がその姫、セラアと同じ名だからである。

結局レイズは徹夜をしてしまった。

あれから色々考えても、どうしても自分や母の名前の合致を偶然とは思えずにいた。

もしかすると、母はこの国と何か関係していたのかもしれない。

それを確かめるには、王への拝謁は良い機会だった。

後から同い年ぐらいの小間使いにクローザーという国のことを訪ねると、こちら辺では有名な大国であるという。

そして、姫の名はセラアという。

ここまで合っている国が2つとあるとは思えない。

そして、拝謁の時間がきた。

レイズに眠気という言葉は見当たらなかった。

いつもと同じように冴えた目をしている。

「ここが拝謁の間だよ。王様にくれぐれも粗相のないようにね」

クーラに言われ、レイズは笑顔でうなずき返し、静かに部屋に入っていく。

レイズは、一応王子であるから、こういう時の作法は心得ている。それを詳しく書いてもおもしろくないので、話の部分だけ簡潔に記述させていただく。

「そなたが新しく入ったレイズという者が」

「はい」

王の言葉にレイズはひざまずいたまま答える。

「顔をあげなさい。そなたは庭に倒れていたところを介抱され、わが城に雇われたいと申したそうだが、何故だ？」

レイズは王の言葉通りに顔をあげ、王の目を捉え、言葉を紡ぐ。

「私は庭で倒れる前の記憶がございません。

それゆえに、どこへも行くあてがございませんでした。

それならば何か生きていく糧を欲しいと思い、介抱して下さったクーラさんにお頼み申し上げたのです」

「記憶がないのは嘘だ。

しかも、レイズはこの時代の言語に合わせ、かつあまり王族らし

さを出さないよう訛りを混じらせて話した。

だが、それでも行くあてがないのは本当で、なにより王の目をしつかりと見て話したことが信頼を得たのか。

王は、うむ、とうなつてから、レイズが城で働くことを許した。

それから、レイズは城でひたすら働く毎日だった。

王族暮らしをしてきたので、慣れないことばかりで苦勞もした。

だが、本で得た知識も手伝って、手元はまだおぼつかないもの、きちんとかんしていった。

小間使いをしていると、色々な人々の噂を耳にすることもある。なにやら、不穏な噂が辺りを飛び交う。

今日は赤月7日。「国の滅ぶ」日まであと3日。

たまに廊下ですれ違う高官も、どこことなく緊張感をまとっている。

そういえば、誰があの手記を残したのだろう。

レイズはそれが気になっていた。

当日になる前に、なんとか姫が書いた人に会いたいが……。

レイズはクーラに相談してみることにした。

「はあ………?」

相談して返ってきたクーラの反応はまずこれだった。

それはそうだろう。

たかが小間使いの新参者のくせに、姫か姫の側近に会わせる、などと無理な相談だ。

「あんた、自分が何言ってるのかわかってるの?」

その無理な相談をしてきた本人をクーラはじとーっとした目で睨

みつける。

だが、レイズは一向に気にした様子もない。

「無理な話だけれど、なんとかお願いできないかな？」

今この世界で頼れるのはクーラしかいなかった。

その気持ちが出てきているのか、ここ最近レイズのクーラへの言葉遣いが崩れてきた。

「……………さすがにそれはあたしでも頼めないわ。あんたが直に行くことね」

その通りだった。

クーラにそのようなことまで頼む自分がいけないのだ。

「……………そう、だよね……………ごめん、仕事に戻るよ……………」

レイズは肩を落として、また仕事に戻るために小間使いの控え室を出ようとする。

「ごめんね、レイズ」

クーラはすまなそうに出て行くレイズに声をかける。

なんだかんだ言うものの、彼女はやはり世話好きである。

レイズは、気にしないでと言うように、手のひらをヒラヒラとさせて、扉の向こうに消えた。

クーラが悪いわけじゃない。やっぱり自分で行かないと。

レイズがどうしたものか思案しているところに、侍従長に呼び止められた。

「王様がお呼びだ」

これはさっそくチャンス到来？

レイズは不謹慎にもそう思っていた。

そして、レイズは王の前にいた。
しかも、国賓が招かれるような個室に、王と2人だけでいた。

「そなたに少し聞きたいことがある」

すぐ側で聞くと、王の間で聞いたよりも王の声は重く響いて聞こえた。

レイズも真剣な面持ちで受け答えをした。

「何なりと」

「そなたは、この国の人間ではないのか？ ……正直に全てを話しなさい」

いきなり核心をついてくる王の言葉に、レイズは背筋に寒気を感じた。

ここで嘘をつくわけにはいかない。きっと王には何か考えがあるのだ。

レイズは恐る恐る口を開いた。

「……記憶がないというのは嘘です。」

私はザグス暦2007年のこの土地にある国の王子で、命を狙われて追われているうちにこの時代へと来ました」

王はレイズの言葉を捕まえるかのような鋭い視線でレイズを見て、その威厳ある声を出す。

「……この土地にある国と……そう言うからには、その時にはもう我が国はないということだな」

レイズは少し驚いた。

いくら本当のこととはいえ、このような話をすぐに信じてもらえるとは思っていなかったからだ。

レイズはおずおずとまた口を開く。

「……今話を、信じてもらえるのですか？」

「私には一つの確信があった。我が姫には時空に干渉する力が備わっている。」

その姫が、この国の滅びる日を予見している。だが、それは歴史の一幕ゆえ、仕方のないこと。

だが、彼らは我が国をなかつたものにしようとするという。それは我らが生きてきた証を全て消されるという耐え難い苦しみだ。

だから、姫は自分を犠牲にすることを思いついた。

クローザー国の王族の男子は皆女好きだ。

彼らの狙いの中には、この美しい姫と、姫の力があると思われる。だから、姫は彼らの中に入り込み、私達の証を残そうと考えているのだ。

……そして、今私の目の前にそなたがいる。姫に……セレアに、会って見ないか？」

言葉が切れると同時に、扉が開いた。

レイズはあまりにも色々な情報が入ってきて、整理ができていないまま、セレアが姿を現した。

セレアの姿を目にしたレイズは、その場で固まってしまった。

なぜなら、姫は、写真でしか見たことのない自分の母にそっくりだったからだ。

レイズが固まったままで、王は口を開いた。

「そなたはセレアの面影を宿している。だから、もしか、とっと思っていただ。」

セレアは自身の全ての力を使い、自分の血に呪いをかけたという自分の魂が流転を繰り返し、自分の血が流れる体に宿るようにした。その記憶を保持し続けたまま。

ただ、それは女だけにしか発揮されず、その呪いの代償なのか、

寿命は短いらしい。そなたの母は、今も健在か？」

レイズはだんだん全ての謎がつかないまま、いく不思議な爽快感を覚えていた。

そして、口は勝手に動いていた。

「いえ、母は……私が幼い時、3歳の時に亡くなりました……」

王はまたとつとつと話し始める。

セレアはその横で優しく王の肩に手をのせて、黙って話を聞いていた。

「きつと、自分の死期を悟ったセレアは、そなたに望みを託して、その球を作ったのだと思う。」

その体に流れている血のために、少しだけ残っていた力を使って、そのために寿命をさらに削ったのだろう。なぜそなたが選ばれたかわかるか？」

レイズは首を横に振って「いえ」と答えた。

「セレアの呪いには、この土地を離れないように、ということも含まれていた。」

この土地には不思議な力の磁場があり、この土地だからこそセレアはその力を発揮できた。

クローザー国は、もしかしたらそこまで知っているのかもしれない。

先ほど、呪いは女にしか効かないと言ったな。

だから、女はこの土地から離れられぬのだ。

しかし、クローザーの中には、いつ私達の記録が消されるかわからぬ。

クローザーの王には、乱暴だが切れ者が多い。

だから、私達の全てを知っている誰かが、クローザーから離れた所で、記録を残さなければならぬのだ。

そして、そなたはセラアの教育のおかげで、非常に勉強熱心で、好奇心溢れる若者になった。まさにかのレイズのように。

そなたの持っている本は、我が家臣、セラアの側近に書かせたものだ。

そして襲撃後に、セラアが密かに書庫に隠したそうだよ。

君は選ばれた。その本と球と共に、生き残ってくれ」

最後の言葉の重みが、レイズはのしかかってくるような感じを覚えた。

すると、セラアがレイズの側に近寄ってきて、その目の前でひざまずき、レイズの顔を両手で優しく包む。

目と目が合い、レイズは不思議な温かい気持ちに溢れていた。

「レイズ、私は口下手でありちゃんと言葉にすることができないのだけれど、これだけは言えるわ。……レイズ、あなたのことを愛しています」

レイズは目の奥が熱くなったかと思うと、頬を伝う何かを感じた。涙だった。

セラアはゆっくりとレイズを抱きしめる。

レイズは、嗚咽をあげながら、しばらくセラアに抱きしめられたまま泣いた。

一度に色々なことを言われて、レイズは気持ちが高ぶっていたが、一日が経って、少し落ち着いていた。

もう今日は赤月8日。今日、クローザー国が攻めてくるかもしれないと知れる日である。

もうすぐ、この国は滅びる。

レイズはふと、高官の手記の文を思い出した。

『かの有名なレイズのような策士がいれば、そのような形勢も逆転するのかもしれないが』

自分はそのレイズと同じ名なのに、何もできないのか。

いや、もしかしたらできるかもしれない。

だが、それは。

「許されないことよ」

自分の考えが見透かされたかと思い、レイズは体を大きく震わせた。

すると、目の前にはレイズを睨みつけるクーラがいた。

「……………こんなところでサボっているなんて、小間使いとして許されないことよ！」

忙しいんだから、さっさと外に出なさい！」

クーラに怒鳴りつけられ、レイズは慌てて控え室の外に出ていく。

クーラにそこまで言われる筋合いはないのでは？と思いつつも、

世話になっているので、口に出しては言えなかった。

だが、なんとなくレイズはクーラの目がいつもと違う落ち着かないもののように感じた。

何かが、おかしくなってきたのか…………？

しかし、レイズはなぜか、この国をどうにかしようという気はなくなっていた。

物事は何にせよ、他人に「許されないこと」と言われたからだろうか。

赤月10日。その日は、文字通り視界が赤に染まった日だった。襲撃直前、レイズは王の側近達に城から少し離れた場所に移された。

なんとかしてもレイズを守るためである。

レイズは離れがたかったが、王やセラアのために、自分は生き残らねばならない。

生き残らねばならないのだが……。

レイズはなぜか炎に包まれる城の中にいた。

このような中に人がいる訳もなく、レイズは一人だった。

どんだん火が燃え広がり、もうしばらくすると、ここも崩れ落ちそうだった。

生き残らねばならないのに、なぜ自分はここにいいのか……？

レイズはそう思うものの、体を動かす気にはなれなかった。以前自分のいたラクアクローザー国はともいづらかった。

第一王子以外は、あまり大事にされないからではない。

何か、国の人達と自分は違っている気がしたのだ。

ただ、心の支えは、不思議なつながりとやすらぎを覚える母の写真だけだった。

その母の魂の故郷から、離れがたかった。

ここがなくなれば、もう自分に故郷はない。

このまま、この国と消えてしまえれば……。

想いはどんどん膨らんでいく。

しかし、その時だった。

「ちょっと、あんたこんなトコで何やってんの!？」

聞き慣れた声が出て、レイズは廊下の方に目をやった。

本当なら、そこは壁であるはずなのだが、破壊されつくして、向こうの廊下とつながっていた。

そして、そこにはクーラがいた。

「クーラか……」

レイズは気のない返事をした。

「クーラか、じゃないっての！！ 早く逃げるのよ！！」

クーラがレイズに近づいて、腕を引っ張り、無理矢理立たせようとす。

しかし、レイズは全く動く素振りを見せないため、動かせなかった。

「あんた何やってんのかわかってんの？！」

もうこの国は滅びるわ。あんたは大事な仕事があるんでしょ？！

それなら、ちゃんと仕事を果たしなさいってのよ！！」

レイズはその言葉に驚いて、思わずクーラの方を見た。

「なぜ、君が知って……？」

クーラはそれに構わず、さらに言う。

「いいから、まずはここから逃げるのよ。生き残るのよ。」

……お願いだから、あたしのためだと思って一緒に行くのよ！！」

世話になった人に、ここまで頼まれては、行くしかないかな。

レイズは、セリアに感じたのと同じ温かい気持ちをクーラに感じていた。

「君がそう言うなら、君のために」

レイズはそう言うと、立ち上がって、クーラの手を引いて外に出た。

本と球も持って。

そして、レイズ達が出たと同時に、その部屋の天井は崩れた。

そして、レイズ達は燃えゆく城の背にして、少し離れた森の中にいた。
森の中ならば、少し動きは取りづらいものの、敵国にも見つかりにくいだろう。

やっとレイズ達は落ち着くことができた。

「ごめんね、クーラ、君には世話になりっぱなしで。せつかくの髪が台無しだ」

レイズは、隣に座るクーラのところどころ焦げてしまった髪を一房取って言った。

「ああ、別にこれはいいのよ」

クーラは、さして気にしてもいないように言ってから、自分の髪の毛をつかみ　引き剥がした。

レイズは驚いて目を大きく見開いて見たクーラの髪の毛は、短めに切られた光り輝く金髪だった。

そして、その手に、焦げた赤みがあった以前の髪を持っている。

「この髪は変装のためのものよ。」

そして、クーラってのは偽名で、あたしの本当の名前はクレアドール。

歴史を見届け、記録し続ける組織に属しているの。

あんたも、今からその組織の一員よ」

なんだか、いきなり色々なことが明かされてばかりだなあ、とのんきにレイズは思いながら、クーラを黙って見ていた。

もうレイズは驚き疲れていた。

自分を導く運命があるのなら、それに従っていくまで。

それにレイズは今、ゆつくりと違う生きる魅力を感じていた。

「やっぱり、そうじゃないかと思っていたよ。」

だって、赤い金髪は君には似合わないと思っていたんだ。

もっと、そう、今の色みだけにきれいな色の髪だと思っていたよ」

レイズは笑顔でクーラに向かって言った。

クーラはみるみる顔を赤らめて、「バ、バカじゃないの！」と言
ってそっぽを向いて座り込んでしまった。

レイズは楽しい笑顔のまま、クーラを見ていた。

「だから、君は僕に大事な仕事があるって知っていたんだね」

クーラは、不機嫌な顔をゆつくりとこちらに向け、うなずいた。

その様子がなんだかかわいらしくて、レイズはますます笑みがこ
ぼれた。

そして、クーラの目の前まで行き、彼女の片手を自分の両手で握
り、言った。

「これからもよろしくね、クレアドール」

「クレア、でいいわよ。呼びづらいから」

クーラ、いや、クレアは少しはにかんだ笑顔で、レイズの手を片
方の手をのせた。

彼らの歴史はこれから始まる。

BGM by GARNET CROW ”クリスタル・ゲージ”
RAN ***2005/4/12***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332t/>

Lost Legends

2011年7月8日14時56分発行